

# 子どもとの同居と高齢者の受診行動 ——老齢者生活実態調査（1963年）の再分析から——

帝京大学 石島健太郎

## 1. 問題の所在

本報告の目的は、1960年代における高齢者の受診行動を規定する要因を明らかにすることである。高齢者福祉をめぐるのは、不十分な年金制度を背景とした子どもへの経済的な依存が主題となってきた60年代に対し（岩井 2001）、70年代になると、老人医療費無料化を通じて、いわゆる社会的入院の問題化として高齢者の医療ニーズが顕在化していくことになる（冨江 2001）。しかし、栄養状態や平均寿命を踏まえれば、70年代の高齢者が60年代に比べて特段に不健康だったとは考えにくい。では、70年代に顕在化する高齢者の医療ニーズは、60年代においてどのように準備されていたのだろうか。

## 2. 方法

神奈川県民生部と東京大学社会科学研究所によって、60歳以上の高齢者を含む世帯を対象に実施された老齢者生活実態調査（1963年）の再分析を行う。分析視角としては、岩井（2001）と同様に子どもとの同居に注目する。同居する家族へのケアの期待は受診を抑制するのか、それとも病院はむしろ家族内部の秩序の維持のために積極的に利用される（Parsons 1952 = 1994）のかを把握することで、高齢者の経済的自立と医療ニーズの連関を理解することを目指す。

## 3. 結果

既存研究と同様、60年代の高齢者の子どもへの経済的依存が確認された。一方で、資産収入などによって子どもとの別居を可能としている高齢者も少数ながら存在していた。また、受診行動は、高年齢層、無職層、子どもとの別居層において積極的であった。とくに子どもとの同居については、擬似的な健康の指標としての日常生活の不自由の有無や世帯収入などの変数を統制してもなお、受診を抑制することが示された。

## 4. 結論

60年代における高齢者の医療ニーズは存在しつつも潜在化していた。受診に積極的な子どもとの別居層は少数派であり、多くの高齢者は同居する子どもにケアを期待することによって受診を抑制していたからだ。その意味で、1970年代以降の年金制度の拡充による高齢者の経済的な独立と医療ニーズの前景化は、ケアの担い手からの離脱に媒介された一連の現象であった。また、子どもとの同居が、ケアの家族化のみならず、その始点で医療専門職の知識を得る機会である受診をも抑制するという意図せざる結果を招くことは、三世代同居が一部で政策的に推進される現代においても参照されるべき歴史である。

## 文献

- 岩井八郎, 2001, 「高齢者の社会的地位の転換——SSM調査による高年齢層の職歴・所得・家族に関する分析」『理論と方法』16(2): 211-27.
- Parsons, T. and R. C. Fox, 1952, *Illness, Therapy, and the Modern Urban American Family*, *Journal of Social Issues*, 8(4): 31-44. (= 1994, 渡辺智恵・高城和義訳, 「医療への社会文化的アプローチ・序論——病気、治療と現代アメリカの都市家族」『廣島法学』18(2): 131-54.)
- 冨江直子, 2001, 「『物語』を構成する政治過程——1960-70年代における高齢者福祉政策を題材として」『年報社会学論集』14: 27-38.